

『平家物語』の翻読語と個性的文体

——延慶本と覚一本の比較——

藤 井 俊 博

一 翻読語と文体の問題

翻読語は、多く二字漢語を和語によって直訳的に生み出された複合語（また複合的な句を含む）であり、漢文訓読の場ではなく、自作の文章で用いる独自の複合表現として生み出された語である。翻読語は、語形成の源を漢語に持つという性格上、類型的文体としての漢文訓読調の文体指標の一つとなるが、一方で、作品内容によって独自に生み出されるため作者の表現意図を探る個性的文体の研究の観点においても有効である。

筆者はこれまで、『万葉集』『宣命』『源氏物語』『今昔物語集』を取り上げ、翻読語の文体的な意味について論じてきた⁽¹⁾。本稿ではこれまでの論考を承け、和漢混淆文の典型と目される『平家物語』における同義的結合の複合動詞を悉皆的に抽出し、平安和文にも見られる語、中世の和漢混淆文に多い語、『平家物語』に特徴的な語に分類し、『平家物語』の翻読語の性格や表現意図について考察する。『平家物語』の本文は、古態を留めるとされる読み本系の延

慶本と、語り本の代表的テキストであり文学的表現として完成形態とも言える覚一本系統のテキストである高野辰之氏旧蔵本（覚一別本、以下、高野本）を用い、両テキストの文体の特徴や、表現志向の相違点について論じることが目的とする。

二 『平家物語』の翻読語の概要

漢文には、同義的な二字を並列した「連文」の漢語が多く見られる。「連文」の直訳に当たる複合動詞は「翻読語」として漢文の影響を受けた和文や和漢混淆文に広く用いられる。本稿で扱う連文の翻読語は「同義的な二字漢語を和語の動詞二語で直訳して生み出された語」であるが、「制し止む（制止）」のように漢語サ変動詞を含む例も含める。

まず、高野本『平家物語』から連文の翻読語と目される複合動詞を悉皆的に抽出する。資料には『日本古典対照分類語彙表』（『平家物語（高野本）語彙用例総索引』による）を使用する。連文からの翻読語と考える基準として、同義的な二語の複合動詞について、観智院本『類聚名義抄』等の訓を根拠に漢字表記を想定し、それが『大漢和辞典』の熟語項目に表記や意味が対応して存在するものとする。次に該当例の高野本での例数と『大漢和辞典』の熟語項目にある漢語を傍線を付して示した（複合動詞が漢語の転倒形に当たる場合は括弧内に示した）。例は頻度順に示し、同頻度の語は五十音順で掲示する。また、同語彙表で高野本『平家物語』以外の作品に見られる場合、その作品名を注記し、さらに丸括弧内に『平安時代複合動詞索引』に見える作品名を略称で補った。さらに、和文や和漢混淆文に見られるか、『平家物語』に特徴的に見られるかによって、次の記号を付した。

■ 平安和文にも広く見られる語。

★ 和漢混淆文に多く見られる語。

★H 『平家物語』に特徴的に見られる語（一部、他作品にあるものも含む）。

なお、「来至」による翻読語と思われる「きたる」は、すでに「来」の訓読語として一語化していると考えて除いた。また、同義的結合であるが、「のぼりあがる」「せきふたく」のような適当な訓字が見つからない語や、「たえいる（絶入）」「たえはつ（絶果）」のような元になる漢語が想定しにくい語も除いた。

《平家物語に見られる同義的結合の複合動詞》

いでく73

出来 | ■万葉 竹取 伊勢 土佐 蜻蛉 枕 源氏 紫 更級 大鏡 方丈 宇治 徒然（平

中 落窪 宇津保 和泉 寢覚 浜松 狭衣 栄花 堤 讚岐 法華百座 今昔 打聞 今鏡

とりかへ 宝物 古本)

をめきさけぶ30

喚叫（叫喚） ★H（讚岐）

おしはかる19

推量 | ■蜻蛉 枕 源氏 紫 更級 大鏡 宇治 徒然（三宝 落窪 多武峰 和泉 寢覚

浜松 狭衣 栄花 堤 讚岐 源氏絵詞 今昔 今鏡 とりかへ 宝物 古本)

せめたたかふ19

攻戦 | ★H（今昔）

なきかなしむ13

泣悲（悲泣） ★宇治 徒然（三宝 宇津保 多武峰 浜松 今昔 とりかへ 宝物 古本)

のこりとどまる12

残留 | ■源氏（今昔 梁塵口伝)

からめとる 11	捉取	★宇治(今昔)
なげきかなしむ 9	歎悲(悲歎)	★(浜松 今昔 とりかへ 宝物)
あひしらふ 6	応答	■源氏 徒然
おそれをののく 6	恐慄	★方丈
にげさる 5	逃去	■源氏 宇治(今昔 打聞)
あそびたはぶる 4	遊戯	■源氏(三宝 法華 今昔 とりかへ)
おちおそる 4	怖恐	★宇治(大和 今昔)
うばひとる 4	奪取	■源氏(三宝 宇津保)
おりくだる 4	降下	★宇治(三宝 とりかへ 源通親日記)
さえうす 3	消失	■万葉 竹取 蜻蛉 源氏(三宝 落窪 宇津保 浜松 狭衣 法華 今昔 とりかへ)
とりう 3	宝物	源通親日記)
てりかがやく 3	取得	■竹取(三宝 寢覚 栄花 法華 今昔 とりかへ)
ひきのく 3	照耀・照耀	■竹取(三宝 宇津保 浜松 栄花 今昔)
ほろびうす 3	引退	★宇治(栄花 讃岐 今昔 打聞)
まひをどる 3	滅亡・亡失	★H
あがめうやまふ 2	舞躍	★H
	崇敬	★H(今昔)

あきたる2
あひあたる2
うちたひらぐ2
おいおとろふ2
おどろきさわぐ2
さきわかつ2
とりおこなふ2
にげかくる2
ばひとる2
あきみつ1
あはれみかなしむ1
あらはれいづ1
いたはりなぐさむ1
うけたもつ1
おこしたつ1
おつばなつ1
かへりさる1

飽足
相当
討平
老衰
驚騒
割分
執行
逃隠
奪取
飽満
憐悲・憐哀
現出
勞慰
受持
起立
追放
婦去

■万葉
★H(今昔)
★H(三宝)
■竹取 源氏 更級(三宝 落窪 宝物)
■蜻蛉 源氏 大鏡(宇津保 寢覚 浜松 今昔)
★H
■源氏 徒然(三宝 栄花 今昔 今鏡)
■蜻蛉 源氏(三宝 落窪 宇津保 寢覚 浜松 今昔)
★土佐 宇治(宇津保 堤 今昔 とりかへ)
★大鏡 宇治(寢覚 浜松 狭衣)
★H
★大鏡(三宝 今昔)
■枕 宇治(今昔 今鏡 古本)
★H(今昔)
■源氏(三宝 今昔 打聞)

『平家物語』の翻読語と個性的文体

せいしとどむ ¹	制止	★宇治
たづねとふ ¹	尋問	■源氏 更級 宇治(平中 三宝 宇津保 寢覚 浜松 栄花 今昔)
たづねもとむ ¹	尋求	★宇治(三宝 落窪 宇津保 浜松 今昔 とりかへ)
たへしのぶ ¹	堪忍	★徒然(法華 宝物)
つかれよわる ¹	疲弱	★H
とちふさぐ ¹	閉塞	★H
とらへからむ ¹	捕捉	★宇治(今昔)
なりとよむ ¹	鳴動	★方丈
にげまぬかる ¹	逃免(逃遁)	★H(にがのがる)今昔 打聞
はきのごふ ¹	掃拭	★徒然(今鏡)
はなちやる ¹	放遣	■源氏(宇津保 今昔)
ほろぼしうしなふ ¹	滅亡・亡失	★H
むすびあつむ ¹	結集	★H

語によって、用いられる作品の範囲や用例数に大きな差があることが窺える。次節以降では、これらを、「平安和文にも広く見られる語」「和漢混淆文に多く見られる語」「『平家物語』に特徴的に見られる語」に分け、個性的文体の面から考察していく。

三 平安和文にも広く見られる語―「おしはかる」―

『平家物語』には、平安和文にも広く例が見られる語がある(■)。

いでく(出来)、おしはかる(推量)、のこりとどまる(残留)、あひしらふ(応答)、にげさる(逃去)、あそびたはぶる(遊戯)、うばひとる・ばひとる(奪取)、にげさる(逃去)、きえうす(消失)、とりう(取得)、てりかかやく(照輝)、あきたる(飽足)、おいおとろふ(老衰)、おどろきさわぐ(驚騒)、とりおこなふ(執行)、にげかくる(逃隠)、あきみつ(飽満)、おこしたつ(起立)・かへりさる(帰去)、たづねとふ(尋問)、はなちやる(放遣)

最も例の多い「いでく」は次節で「いできたる」とともに論じることとし、ここでは次いで多い「おしはかる」について、その成立過程と類型化した用法について述べておく。

「おしはかる」は平安和文にもよく浸透しており、『日本古典対照分類語彙表』によると『蜻蛉日記』7例、『枕草子』10例、『源氏物語』94例、『紫式部日記』1例、『大鏡』5例があり、その他多くの和文作品に例が見られる⁽²⁾。

① いらへもせで、ろんなう、さやうにぞあらむと、おしはかるれど、人の聞かむもうたてものぐるほしければ、……

(『蜻蛉日記』康保三年四月)

② かくまでたどり歩きたまふ、をかしう、さもありぬべきありさまにこそはと推しはかるにも、わがいとよく思ひよりぬべかりしことを譲りきこえて、……

(『源氏物語』夕顔)

③ 多かる中にも、いかに御心ゆき、めでたくおぼえてあそばしけむと推しはからるるを、御女の染殿後の御前に、桜の花の瓶にさされたるを、……
〔大鏡〕 天・太政大臣良房・忠仁公

また漢文系統の資料では観智院本『類聚名義抄』には「推」の訓に「オシハカル」が挙げられており、漢文訓読語としても用いられている⁽³⁾。

翻読語「おしはかる」の元となる漢語の候補として、「推量」「推測」「推度」「推断」など複数の語が指摘できる⁽⁴⁾。さらに、観智院本『類聚名義抄』で「ハカル」訓のある字「忖」「度」による「忖度」や、観智院本『類聚名義抄』に「アキラム」「サトル」の訓のある「察」を含む「推察」も意味から見て関連があるろう。

これらの中で「推測」「推度」は、『六国史』『国史大系』に含まれる日本漢文や和漢混淆文の資料に例が見出せないが、「推量」「推断」「推察」「忖度」は例が見られる（「推量」は後述）。「推断」の例が最も古く、『続日本紀』（七九七）に2例あり、その他『令義解』（八三三）4例、『三代実録』（九〇一）3例、『類聚三代格』（一一C）2例が見られる。「忖度」は『日本後紀』（八四〇）1例が古く、その他『菅家後集』（九〇三頃）1例、『日本紀略』（一一C）1例がある。「推察」は古例がなく、『三代実録』1例、『扶桑略記』（一〇九四）1例、『古今著聞集』（一二五四）2例、『吾妻鏡』（一一三〇〇頃）11例等が見られる。延慶本と高野本にも「推察す」の例は各1例見られる。

右の語群の中で、「推量」は『大漢和辞典』に項目があるが例示がなく、『全唐詩』『全唐文』『二十五史』などのデータベースにも例がない。『文淵閣四庫全書』でも6例のみでそのうち唐代の例は樊綽『蛮書』のみである⁽⁵⁾。大蔵経データベースには58件例が検索されるが『維摩經略疏序』の1例を除いて全て国書の注疏の類での例が多くを占める。このように唐代以前の例は少ないのであるが、『四部備要』データベースによると賈公彦（唐代初期）の『周礼

注疏』『儀礼疏』の例が見える点は注目される。

④ 冬日夏夜長短不_レ同、是以推_レ量_レ此次日辰之早晏_二也。
〔『儀礼疏』卷四七〕

⑤ 総_二結上文三者_一故以_二此義_一推_レ量_レ之_二也。
〔『周礼注疏』卷四一〕

用例数は『周礼注疏』3例、『儀礼疏』1例で、必ずしも多くないが、律令制度を支える重要な経書の一つとして本邦の官制に影響を与えた『周礼』『儀礼』の疏(賈公彦)の用語が貴族層に受容され広まった可能性が考え得よう。一方、用字の面から「推量」の語形を受け入れやすい条件も指摘できる。『色葉字類抄』では「量」「推」が「量_{ハカル}多_少」推_レ量_レと「量_{ハカル}測_レ……」と「ハカル」の最上位に掲出されていて、「量」「推」は「はかる」の上位に掲載されている。すなわち、「推量」の語形は常用的な漢字同士の組み合わせとして日本人の漢詩・漢文で定着しやすかったと考えられる。そのため、「推測」「推度」「推断」など「おしはかる」と読まれる語の代表形のように認識されていたという事情が考えられる。

延慶本に至るまでの「推量」(「推量す」または「おしはかる」)の例を辿っておこう。日本漢文では、和文の「おしはかる」が見える『蜻蛉日記』『源氏物語』の成立時期を遡る漢文に例が見出せる。国史類では「推量」の古例に平安初期『日本後紀』の弘仁三年(八一三)の例や、『続日本後紀』の嘉祥二年(八四九)の例などがある。

⑥ 依_レ例_レ勘_レ返、判官主典、或_レ仮_レ或_レ病、不_レ可_二署名_一、推_レ量_レ其_レ理_二。
〔『日本後記』弘仁三年十一月〕

⑦ 輒_レ解_二却_レ之_一、推_レ量_レ意_レ志_二稍_レ涉_二不_レ臣_一。
〔『続日本後記』弘仁三年閏十二月〕

『日本国語大辞典(第二版)』の挙げる『田氏家集』(八九二頃)の漢詩の例もあり、貴族層による文学作品にも定着していることが窺える。

『平家物語』の翻読語と個性的文体

⑧ 暗記徐来長置_レ榻、推量鐘対欲_レ鳴_レ琴。

(『田氏家集』中・独座懐古)

公家日記や古文書などの変体漢文にも例が多く、東京大学史料編纂所フルテキストデータベースによると、「平安遺文」の『政事要略』承和六年(八三九)の例を最古に、「古記録」では『小右記』天慶元年(八三八)の例など総計146例、「古文書」では『東大寺文書』貞観元年(八五九)の例など総計380例が見える。

⑨ 宜_下早仰_二当国_一推量損戸_一預令_中交易_上。

(『政事要略』承和六年十月)

⑩ 原氏宗任大将、彼年有_二射礼_{《節》}者、以_レ是推量、大将雖_レ闕、行步射手結也云云。

(『小右記』天慶元年五月)

⑪ 本少_三治田_一、有数見_レ熟、推量此_一、是本寺田姦為_三治田_一。

(『東大寺文書』貞観元年)

古文書の中には、次の天喜二年(一〇五四)の例などのように、名詞に「御」を冠した「御推量」221例が見られ、中世く近世の古文書で定着している。古い例を挙げておく。

⑫ 殊可_レ在_二御推量_一也者、牒送如_レ件

(天喜二年(一〇五四)「王助時田地作手売券」)

これを受け、近世には、「御推量」を表す女房言葉「おす文字」も生み出された。

⑬ 悵気しらるる身の辛さ、御推もしと、ひんとする。

(『浄瑠璃』丹生山田青海剣(一七三八))

延慶本・高野本には漢語サ変動詞「推量す」はないが、土井本『太平記』では漢語サ変動詞「推量ス」と「おしはかる」がともに見える。古辞書でも『饅頭屋本節用集』『易林本節用集』『温故知新書』『運歩色葉集』は、「推量(スイリヨウ)」と「ヲシハカル(推量)」の両語を挙げる。『日葡辞書』では、「Suirio」の項に「Voxifacaru」の訓釈を挙げてゐる。

延慶本の漢字表記では、「押量ル」の表記が12例見られる。「押」の漢字は意味によるのでなく、延慶本での「おす」「おし〜」の通用字を用いたのである。本来的な表記である「推量」の例も3例見られ⁽⁶⁾、漢語であるという意識が強かったためか返読表記を交えた⁽⁵⁾のような例も見られる。

⑭ 指当リテノ人目ノ恥シサ、心ノアヤシサ、ナゴリノ悲シサ、トニカクニ、推量レテ無慚也。

(延慶本第一本一七)

⑮ 何計カハ悲カリケム、被推量テ、無慚也。

(延慶本第六本一十二)

延慶本の「推量(おしはかる)」の表記は、右の国史類・記録類の「推量」表記を承けると考えられる⁽⁷⁾。

⑭⑮の例のように延慶本では「おしはかれて無慚なり」の例が見られる。これに対し、高野本では「むざん」は「心のうちこそ無慚なれ」(2例あり)の形があるのみで、「おしはかれて」との組み合わせは全て「あはれなり」が専用されている。すなわち、「おしはかる」の19例中17例が「心のうち……おしはかれてあはれなり」の形で用いられており、次のように人物の心情を推し量る表現が類型化している。

⑯ さばかんの法務の大僧正程の人を、追立の鬱使がさきにけたてさせ、けふを限りに都を出て関の東へおもむかれけん心のうち、おしはかれて哀也。

(高野本卷二 一座主流)

⑰ 今はいとけなきおさなき人々ばかりのこりみて、又こととふ人もなくしておはしけむ北方の心のうち、おしはかれて哀也。

(高野本卷二 小教訓)

⑱ 北方大納言佐殿は、只なくより外の事なくて、つやつや御かへり事もし給はず。誠に御心のうち、さこそは思ひ給ふらめと、おしはかれて哀也。

(高野本卷十・請文)

⑭ さすが心づようとり出したてまつるにも及ばねば、わか公をかかへたてまつり、人の聞くをもはばからず、天にあふぎ地に臥して、おめきさけみける、心のうち、おしはかられて哀也。(高野本卷十一・副将被斬)

これらは、いずれも文脈から別離に伴う寂寥感や人物を失って悲嘆する人物の状況が描かれており、人物の心中を察して詠嘆する語り手の批評語として類型化した表現となっている。

延慶本の「おしはかる」も、人物の心中を察する意味で用いる例が大半を占めるが、高野本のように完全に類型化はしていない。「おしはかる」は一つの動詞として未然形、連用形、終止形、連体形の形式でも用いられ、「心ノ内ノ悲ハタダラシハカラセ給ベシ」(第二本)などのような会話文の例も数例見られる。ただし、「おしはかる」40例の中で、「おしはかられて+批評語」の型をとる例が約半数の19例見られ、後の高野本のような類型表現の萌芽となる例も見られる。その内訳は「おしはかられてあはれなり」8例、「おしはかられて無慚なり」7例が拮抗して用いられており、その他に「おしはかられていとほし」4例も含まれ、多様性がある。

「おしはかられて」に続く語の一つ「無慚」は、仏教語としては「罪を犯しながらみずから省みて恥じないこと」(『日本国語大辞典(第二版)』「むざん」による)であるが、中世の和漢混淆文では転じて「残酷なこと」の意味や、さらに「残酷な状態にあつていたましいこと、またそのさま。深く同情すべきさま。不憫。気の毒。むぞう。」(『日本国語大辞典(第二版)』の説明による)のような心情に傾いた意味も生じている。⑭⑮の「おしはかられてむざんなり」の意味も、「悲しい気持ち」が推し量られ、ふびんである「意味と解され、「おしはかられてあはれなり」と同義的と言える。延慶本の「おしはからる」には「さこそくけめ」とともに用い「互ノ心ノ内、サコソハ有ケメト押ハカルル。」(第一末)「今ハ限ノ東地へ趣キ給心ノ内、サコソハ覚シケメト押量ラル。」(第六末)のように心中を推

量する用法があるが、これが「あはれなり」「無慚なり」「いとほし」等の語り手の批評語と合わさり、次第に類型化したのであろう。

右の批評語が「おしはかられて」と組み合わせさせた表現は同趣の表現を作り出すが、一方で表現傾向には大きな差も認められる。それは、⑭～⑲の例に見えるような批評対象となる共起語の相違である。次に延慶本から、批評の対象となつている共起語を批評語ごとにとまどめて示す（形容詞「悲し」名詞「悲しさ」は区別せず「悲し」とする）。

○おしはかられて無慚なり↓悲し（４）哀れを催す（１）涙せきあへず（１）心の中（１）

○おしはかられてあはれなり↓心の中・心の内（４）・心中（２）なごり（１）その他（１）

○いとほし↓心の中悲し（２）心の内（１）その他（１）

「無慚なり」では「悲し」とその関連表現「哀れを催す」「涙せきあえず」が大半を占めており「心の中」の例は1例にとどまる。これに対して「あはれなり」では、「心の中・心の内」「心中」が多く、その他「なごり（惜別の情）」などが用いられているが、「悲し」は見えない。「いとほし」は「心の中こそ悲しけれ」のような両方の鍵語を含んだ表現と共起する例が2例見え、中間的な傾向を見せている。このように、「無慚なり」は「悲し」と、「あはれなり」は「心の中」と結びつく傾向が強く、「いとほし」は両方の性質を兼ねた面がある。表現としては、「無慚なり」では「悲し」と直叙的に心情を述べてそれを批評するのに対し、「あはれなり」では実質的には「悲し」の心情を意味しながらそれを「心の中」と表現するのにとどめて批評する表現と言えよう。文体から言うと前者は心情を明示しそれを漢語で批評する漢文訓読調の直截的表現と言え、後者は心情を明示せず「心の中」と暗示し、和文体の鍵語でもある「あはれなり」で批評する点から和文調の臚化的表現であるとも言えよう。延慶本ではこれらを混用しているのであ

るが、高野本では漢語表現を避けた「心の中、おしはかられてあはれなり」のみを用いてその心情を直叙しない表現を選択している。これは高野本が、より和文的な文学的表現を志向した結果である。

延慶本の「悲しさ」おしはかられて無慚なり」は、「悲しさが推し量られ無慚である」と生硬な漢文訓読調で直接的に心情を提示し推測する表現であるが、この表現では、心情を解説する語り手の付加的な言説に止まってしまふことが多くなる。この点は、「おしはかられてあはれなり」の表現をとった場合でも同じである。次の⑳は悲痛な心情を描こうとする意図は窺えるが、語り手によって付加された感想の域を出ていないようにも思われる。

⑳ (平家の人々の頸が懸けられているのを見て) 主上、女院、内大臣、平大納言以下人々、北方、御船二召テ目ノ当り御覽セラレケリ。何バカリノ事ヲカ思食ケム、御心中ヲシハカラレテ哀也。(延慶本第五本―二十九)

高野本では、批評語が「あはれなり」に統一され、和文的な文脈に溶け込ませた格調ある表現に高められている。

㉑ さる程に萩のうは風もやうやう身にしみ、萩の下露もいよいよしげく、うらむる虫の声々に、いなばうちそよぎ、木の葉かつちるけしき、物思はざらむだにも、ふけゆく秋の旅の空はかなしかるべし。まして平家の人々の心の中、さこそはおはしけめと、おしはかられて哀也。(高野本卷十・藤戸)

㉑の例では「心の中」を含み、その具体的な心情は前文にある「悲し」にあるが、それは人物の心情なのではなく空の様子について述べた表現となっており、人物の心情を直接「悲し」と表現することは巧みに避けている。「ふけゆく秋の旅の空はかなしかるべし。まして平家の人々の心の中、さこそはおはしけめと、おしはかられて哀也。」と、悲劇的な運命を辿る平家の人々の悲痛な心情を「ふけゆく秋の旅の空」と重ねつつ、「なんと哀れなことだろうかと詠歎的に表現している。「旅の空」かなしかるべし」を指示語「さ」で受け和文調の「あはれなり」で末尾をまと

める表現の構成は技巧的であり、延慶本と比べて洗練度の違いは明らかである。

四 和漢混淆文に多く見られる語―「いでく」「いできたる」―

『平家物語』以外にも、和漢混淆的な文献に広く用いられる語がある(★)。『宇治拾遺物語』は中世の和文であり訓読調の語を比較的多く含み、『平家物語』と共通する用語もあるため、同作品に見られる語もここに含めた。

なきかなしむ(悲泣)、からめとる(捉取)、なげきかなしむ(悲歎)、おそれをのく(恐慄)、おちおそる(怖恐)、おりくだる(降下)、ひきのく(引退)、あきみつ(飽満)、あらはれいづ(現出)、せいしとどむ(制止)、たづねもとむ(尋求)、たへしのお(堪忍)、とらへからむ(捕捉)、なりとよむ(鳴動)、にげまぬかる(逃避)、はきのごふ(掃拭)

右の中で、上位を占める「なきかなしむ」「なげきかなしむ」「おちおそる」は和漢混淆文や訓読調を含む一部の和文にも浸透した物語用語である(拙稿二〇二〇a)。もっとも例の多い「なきかなしむ」は次節で述べることとし、本節では延慶本に例の多い「いできたる」について、前節で和文に多い語として挙げた「いでく」と対比して述べておく。

拙稿(二〇二二)では、「いでく」は和文に多く、事物の「出現・発生」(突然現れる)を意味するのに対し、「いできたる」は『今昔物語集』や延慶本に多く、人物や物の「到来」(時間をかけやって来る)を意味する例が多いことを述べた。公家日記などの変体漢文では、人や物を主語としそれが到来する(人がやって来る、物が送られてく

る)意味で、次のような例が数多く見られる。

②② 於_二朱雀門前_一礼_二橋下_一、僧_二廿人_一出来。(『小右記』永延一年二月一日)

②③ 召_二入女房使_一云、参_二中宮御方_一云。袴_二三七_一出来。(『御堂関白記』寛弘元年二月五日)

②④ 九日、癸卯、従_レ寺帰、山城介真助朝臣出来、奉_二仕雜事_一。(『御堂関白記』寛弘四年六月九日)

②⑤ 其後参_二土御門殿_一、右中弁親俊朝臣出来、聊御違例之由昨日中納言殿令_レ承給。(『民経記』寛喜一年六月八日)

訓点を通常付さない変体漢文では「いできたる」と読んだ根拠となる付訓例が少ないが、次の例が見出される。生草がやって来ない意味であり、「物が」到来する」意味である。

②⑥ 生草未夕出(テ)来ラ(未ス)。(『高山寺本古往来』(25))

「いでく」と「いできたる」の相違は、「く」(和文体)と「きたる」(訓読体)の文体の相違ではない。参考になるのは、『日葡辞書』(一六〇三)の記述である。同書では「いでく」の意味を「ある事が思いがけなく起こる、あるいは、もちあがる」とし、漢語「出来(xutrai)」の訓注で「いできたる (ide qianu)」を挙げ、「いできたる」の項では「出る、または、来る」意としており両語は意味が異なる。「いできたる」は『訓点語彙集成』に例がなく、『平安時代複合動詞索引』では『三宝絵』『今昔物語集』『法華百座聞書抄』など一部の和漢混淆文に例があるのみであるが、公家日記や古文書類には①⑧⑨②②のような例が頻出しており、もとは変体漢文特有語と考えられる。『日葡辞書』は「いできたる」を文書語としているが、これは、この語が変体漢文に多いことと関わりう。和文に多い「いでく」と変体漢文に多い「いできたる」は意味も文体的性質も異なるのであり、後述のように平家諸本間で両語の使用に大きな差がある点は、文体の観点から大いに注目されるのである。

「いでく」「いできたる」は、いずれも漢語「出来」に基づく翻読語であろう。「中から出て来る」「発生・出現」を表す漢語「出来」に基づく翻読語「いでく」は『万葉集』に見られるが、中古以降の和歌では用いられず、和文体の物語等で継承された（拙稿二〇一八）。「いでく」は「いづ」に重点のある中国漢文の用法を継承している。一方、変体漢文では「出来」から「いできたる」の翻読語が生じた。「いできたる」は「来」を漢文訓読語「きたる」で読んだ語形であるが、「きたる」の語源「来・至る」に意味の重点があり、人や物がやって来る意味（到来）を多く表した。変体漢文やその影響を受けた和漢混淆文で定着した「いできたる」は、「いでく」と同様「中から出て来る」「発生・出現」の意味を表す例もあるが、「到来」の意味の例が多く用法上の特色となっている。また、変体漢文の「出来」は、「いできたる」の他、漢語サ変動詞「出来スしゆらい」とも読まれた⁽⁸⁾。

『日本古典対照分類語彙表』が基づいた『平家物語（高野本）語彙用例総索引』によると、高野本では和文にも多い「いでく」が73例あるのに対し、「いできたる」の例は存在しない。ただし、語の認定のうえで問題となる例として、「祇王」段に「ぞ出来る」と表記された箇所が2例あり、金田一春彦編『平家物語総索引』や、新編日本古典文学全集テキストに基づいた「中納言コーパス」が「いできたる」として処理している例がある。

⑳ ……たかひに心をいまして、竹のあみ戸をあけたれば、まゑんにてはなかりけり。仏御前ぞ出来る。

（高野本卷一・祇王）

㉑ ……かくなつてこそまいらたれ」とて、かつきたるきぬをうちのけたるをみれば、あまになつてぞ出来る。

（高野本卷一・祇王）

しかし、次のような諸点から、㉒㉓は「いできたる」の例と考えにくく、「ぞ・いでき・たる」の係り結び構文と

解するべきと考えられる。その根拠を次に列記する。

○他の章段にない変体漢文特有語「いできたる」が和文調が特に強い祇王段に例外的に用いられたとすると文体的齟齬が大きく、不自然な用語になってしまう。

○²⁷²⁸の前の文脈に「うちたたくもの出来たり」とあり、この「いでき・たり」を受け、文末表現を係り結びによって強調しつつ反復した表現と解釈できる。

○直前に条件句「見れば」があり物語の常套表現の「見ればくたり」構文と解される。

○「ぞくたる」の係り結びが高野本に散見し、文末表現の基調の一つとなっている（「ぞくたる。」文は、94例）。

○語り本で古態性を含むとされる屋代本でも、同箇所は「ゾ出来タル」となっている。

これらの点を考え合わせると、『平家物語（高野本）語彙用例総索引』が「出来る」を「一つの漢字が二つ以上の単語にわたって表記されている場合」とし「出来る」を「いでき・たる」の表記として処理したのに従うべきである。この表記の類例としては、屋代本に、

②9ヨロボヒクルヲ見ハ、……片手ニハ魚ヲサケテ出来リ。」

（屋代本卷三・有王）

のように「見れば」を受け文末の「いでき・たり」を「出来リ」と表記した例も指摘できる。

以上の種々の点から考えて、高野本に「いできたる」の例はやはり存在しないと判断してよいであろう（龍谷大学図書館本は祇王段自体がない）。一方、延慶本では、索引によると「いできたる」は44例もあり、「いでき」37例を上回る例数が見える。語り本系統でも古態性を含むとされる屋代本には語尾を表記した「いできたる」の確例が9例見られる⁹⁾。すなわち、語り本の中でも、とりわけ覚一本系統の高野本や龍谷大学図書館本において、「いできたる」

を徹底的に回避する方針をとっていることが明瞭に窺えるのである。

このように延慶本と覚一本とで、「いできたる」の使用に対照的な傾向が生じるのは何故であろう。延慶本では、編集段階で変体漢文的な文体要素が多く影響し、「いできたる」が多くなつたのであろう。一方、高野本では、「く」22例に対し「きたる」30例で、漢文訓読語の「きたる」自体を避けているわけではない。この事の意味するところは、「いできたる」の語形を『日葡辞書』が文書語としてるように、文学性に乏しく、変体漢文に基盤を持つ記録語的な文章語として回避したものと考えることができるであろう。では、高野本が和文的な表現「いでく」に統一した意図は何であろう。前節で「おしはかられて無慚なり」のように漢語「無慚なり」との組み合わせより、和文的な「あはれなり」と取り合わせた「おしはかられてあはれなり」を使用する傾向を指摘した。これに照らせば、一つには、「いでく」によつて文体を和文的にしようとしたことが考えられる。ただ、人や物の「到来」を表す場面は多いはずであり、「いできたる」を避ける理由には、表現効果や表現意図の面も強く関わってくるであろう。

この点を文末用法から確認すると、高野本の「いでく」は「いでき・たり」のように「たり」を加える例が29例であるのに対し、延慶本では同様の例は9例に止まる。物語の言語量（延慶本は覚一本の約1・7倍）も加味すると延慶本が「いでき・たり」の形式を使用する割合はかなり少ないと言えよう。その一方で、延慶本では「いできたる」の終止形用法が8例が見られるが、高野本には例がなく、延慶本のみの特徴となっている。

次に、延慶本が終止形の「いできたる」とするところで、高野本が「いでき+て」「いでき+にけり」「いでき+たり」が対応している例を挙げておく（例30と例31、例34と例35は、同文的な箇所例である）。

- ③〇 廿八日亥時計ニ、樋口富小路ヨリ火出来ル。

（延慶本第一本―四十）

- ③1 廿八日、亥剋ばかり、樋口富小路より、火出来て、……
(高野本卷一・内裏炎上)
- ③2 其時又不思議ノ瑞相出来タル。
(延慶本第一末―三十)
- ③3 かかる不思議もいできにけり。
(高野本卷一・鹿谷)
- ③4 水嶋ガ津ニ小船一艘出来ル。
(延慶本第四―十九)
- ③5 水島がとに小船一艘出できたり。
(高野本卷八・水島合戦)
- ③6 其後十一年ト申ケルニ、トガノ尾ノ明恵上人ノ許ニ文学房出来ル。
(延慶本第六末―三十六)
- ③7 さる程に文覚房もつと出きたり。
(高野本卷一二・泊瀬六代)
- 延慶本の「いできたる」には③0「火」③2「不思議」などの「出現・発生」を表す例も見られるが、③4「小船」③6「文学房」などのように物や人が「到来する(やってくる)」意味の場合に「いできたる」が用いられる点に特徴がある。しかし、延慶本の例③6「文学房出来ル」のような表現は、無人称的な客観視点による叙述となり、「やって来た」ことを記録的に述べるにとどまる。これに対し、高野本の例③7は、突然の意の「つと」につづけて「いでき・たり」で文を終止させ、人物が「いでき(突然現れた)」たことを表現している。「いでき・たり」では、鈴木(一九九五)のいう「たり」のメノマエ性の機能が注意される。メノマエ性とは、話し手が移動動作の到着地点に視点を置いて、移動主体の到着の局面を描く性質のことである。つまり高野本の叙述では、物語の語り手の視点から、あたかも文覚が目の前に突如現れて来たのを待ち受けるかのような表現になるのである。高野本では、和文的な「いでき」の「出現」の意味と、「たり」のメノマエ性の機能との相乗効果により、叙述に臨場感をもたらしているのである。

五 『平家物語』に特徴的に見られる語―「をめきさげふ」「せめたたかふ」―

軍記物語である『平家物語』に特徴的に使用される語がある(★H)。

をめきさげふ(叫喚)、せめたたかふ(攻戦)、まひをどる(舞躍)、あがめうやまふ(崇敬)、あひあたる(相当)、うちたひらく(討平)、さきわかつ(割分)、あはれみかなしむ(憐哀)、いたはりなくさむ(勞慰)、おつばなつ(追放)、つかれよわる(疲弱)、とぢふさぐ(閉塞)、にげまぬかる(逃遁)、ほろびうす・ほろぼしうしなふ(亡失)、むすびあつむ(結集)

右の中には他作品にもある語を一部含むが、軍記物語としてのテーマ・素材として戦闘・軍事に関わる漢語が翻読語として取り入れられた語が多い。例えば、「攻戦」にもとづく「せめたたかふ」や、「討平」にもとづく「うちたひらく」は、各々、敵と戦う意味、打ち倒す意味で、軍記物語らしい語である。「追放」にもとづく「おつばなつ」、「逃遁」にもとづく「にげまぬかる」も戦闘による行為として意味的に対をなす。「滅亡」「亡失」等にもとづく「ほろびうす(ほろぼしうしなふ)」は、国家・君臣・寺社等が滅ぶ意味である。これらは漢語でもよいところを和語で置き換えたもので、意味的にも対応している。

一方、翻読語が元の漢語と異なった意味になる例もある。拙稿(二〇二二)では、『今昔物語集』に、漢語(仏教語)と翻読語の意味が異なる例として、「遊行ス(仏教者の諸国行脚)」と翻読語「遊び行く(非仏教者があちこち動き回る)」を指摘した。『平家物語』でも、漢語「結集」に元づく翻読語「むすびあつむ」が、元の仏教語としての

「釈迦の教えを編纂する」意味ではなく、「布地を編み集める」意味に転換させた例を指摘できる。

③⑧ ヤセクロミタル法師ノカミギヌノキタナキガ、ワラワラトヤレタルガウヘニ、アサノ衣ノコ、カシコ結ビ集メタルヲ、ワヅカニカケツ、片ヤブレ失タルヒガサヲキタリ。
(延慶本第六末—三十四)

③⑨ 此尼のあり様を御覧すれば、きぬ・布のわきも見えぬ物をむすびあつめてぞ着たりける。
(高野本灌頂卷)

「むすびあつむ」は、高野本と延慶本に各1例が見えるが、『平安時代複合動詞索引』などにも例が見られず、『平家物語』特有語と言える。延慶本や高野本の作者にとって、仏教語「結集」^{けつじふ}は親しい語であつたはずである。それを元とした翻読語「むすびあつむ」を用い、尼や法師が、釈迦の教えならぬ、ほろ布を編み集めた衣服を着ている様を描くのは、いかにも仏教者らしい発想の転換であり、洒落の効いた表現と評せよう。漢文訓読語が漢文訓読の場でも度も訓読され語形や意味が定着していったのと異なり、翻読語は、自作の文章中で漢語の語形を表現の枠組みとして借りるものであるため、作品中で臨時的な語を生み出すこともある。「あそびあつむ」は、『平家物語』の中で、語形を借りつつ意味をずらせて作られた掛詞的な表現で、一回的な翻読語の事例と考えられよう。

元の漢語と意味が異なる翻読語の中で、例数が多く注目されるのは、「叫喚」に元づく「をめきさけぶ」である。「をめきさけぶ」は、仏教語としては「地獄の苦しみに泣き叫ぶ」意味であるが、延慶本では「悲しみに泣き叫ぶ」、高野本では「大声を出して叫ぶ」意味で微妙に異なった用法で用いられる。以下「をめきさけぶ」とともに、この語と共に用いられる「せめたたかふ」を中心に、両本における文体・表現の特徴を述べておく。

「をめきさけぶ」「せめたたかふ」は、翻読語全体の中でも使用度数が上位の語である。先行する『将門記』『陸奥日記』にも対応する漢語「叫喚」「攻戦」が見え、軍記物語の用語として継承されていることが窺える。

④① 遁^レ火出者驚^レ矢而還、入^二火中^一叫喚。

(『将門記』)

④② 宗任、將^二八百余騎^一、場外攻戰。

(『陸奥話記』)

もつとも例の多い「をめきさけぶ」は仏教語「叫喚」を転倒して作られた複合動詞と考えられ⁽¹⁰⁾、高野本では、次のように漢語「叫喚」と比喩的に関連付けた例もある。

④③ 「残りどどまる人々のをめきさけびし声、叫喚大叫喚のほのほの底の罪人も、これには過ぎじとこそおぼえさぶらひしか」
(高野本・灌頂・六道之沙汰)

仏教語「叫喚」は、地獄で熱などの苦しみに遭い、叫び喚く様を表す。翻読語「をめきさけぶ」も、悲惨な目に遭い、感情の昂ぶりから大声を出す意味で、基本義は通底する面があるが、特に自らや他者の悲惨な状況(死・離別・不遇等)を悲嘆する意味で用いる。悲嘆を意味する語には、和文にも浸透し物語用語となった翻読語「なきかなしむ」もある(四節参照)。延慶本には、次のような対句の例があり、両語の意味の近いことが窺える。

④④ 親ハ子ヲ失ヒヲメキ叫、子ハ親ヲ失テ泣悲ム音、船中ニ充滿セリ。
(延慶本第六末—二十五)

両語には意味・用法の異なる点もある。「をめきさけぶ」は悲嘆する意味に加え、「をめく」「さけぶ」の語義から大声を出す動作に重点があるが、「なきかなしむ」は後項が「かなしむ」であるため心理的意味に重点がある点である。延慶本の「をめきさけぶ」には、次例のように、「天に仰ぎ地に伏して」を前接し、悲嘆する意味を強調する表現がいくつか見られる。

④⑤ 僧都ノ遺言ナムド細ニ語りケレバ、姫君天ニ仰ぎ地ニ臥テ、ヲメキ叫レケル有様、サコソハ悲シカリケメ。

(延慶本第二本—十八)

「天に仰ぎ地に伏して」は、中国漢詩に、元稹「仰天俯地」や王維「俯仰天地」（以上『全唐詩』より）、孟鯁「仰天伏地」（『谷音』〈元〉、『文淵閣四庫全書』より）等の類句が拾える。日本の古記録類でも、『中右記』〈一〇九三三等〉の「仰天伏地」3例、『平安遺文』（東寺百合文書〈一〇七一〉）や『鎌倉遺文』（安芸厳島神社文書〈一二四一〉）の「仰天臥地」各1例の例が見え、このような表現を元に成立した翻読表現と考えられる。その他、「仰天倒地」「臥地仰天」などの形を含め、中世以降の漢文や和漢混淆文において感情表現（主に悲痛）の強調に用いる慣用句として定着したとされている⁴⁴。延慶本では、この句を悲嘆する意味の翻読語「をめきさけぶ」と共起して用いる。感情に伴う動作を大仰に表す翻読表現「天に仰ぎ地に伏して」は、大声を出して悲嘆する意味の翻読語「をめきさけぶ」と文体的にも意味的にも相性がよかったのである。延慶本の「をめきさけぶ」は、その他「声を調べて（声を揃えて）」、「ふしまろびて（地面を転げ回って）」などの句と結びつき、悲しみ叫ぶ動作を強調する類型表現が見られる。

④⑤ 波ノ底ヘゾ被入ケル。是ヲ見奉テ、国母建礼門院ヲ始奉テ、……女房達、声ヲ調テラメキ叫給ケレバ、……

（延慶本第六本―十五）

④⑥ ……那智ノ浜ニテ身ヲ投給ニケリ」ト、御共シタリケル舍人武里ガ申シ、」ト申セバ、北方、「サレバコソ奇シカリツル物ヲ」ト計宣テ、伏マロビテラメキ叫給モ理也。

（延慶本第五末―二十七）

古態を留めるとされる延慶本では、軍記物らしい悲惨な場面を描くのに「をめきさけぶ」が多く用いられたが、高野本においては、悲嘆する意味の中心は平安時代から和文的な物語にも浸透していた「なきかなしむ」に取って代わるようになる（他の物語作品については第二節を参照）。次に、「をめきさけぶ」と「なきかなしむ」の前後表現と合

わさって作られる類型表現について、延慶本と高野本の意味用法をまとめて比較しておこう。

延慶本では、「をめきさけぶ」40例、「なきかなしむ」12例で、「をめきさけぶ」が優勢である。「をめきさけぶ」と前接表現の慣用化した表現には、「天に仰ぎ地に伏してをめきさけぶ」4例、「声を調へてをめきさけぶ」5例「ふしまろびをめきさけぶ」6例など「をめきさけぶ」に共起する類型表現が多く見られる。「なきかなしむ」では「声を調へて」に近い表現の「声々になきかなしむ」1例があるのみである。延慶本の「をめきさけぶ」は、もとの「叫喚」と意味が近く、泣き叫ぶ意味を保っている点が注意される。

一方、高野本では「をめきさけぶ」30例、「なきかなしむ」13例で「をめきさけぶ」の方が多いが、「天に仰ぎ地に伏して」を用いる句は「天に仰ぎ地に伏してなきかなしむ」3例、「天に仰ぎ地に伏してをめきさけむ」1例で、「なきかなしむ」を用いた表現が優勢になっている。その他、「声々になきかなしむ」2例、「声を調へてなきかなしむ」1例など、「なきかなしむ」の例において悲嘆する表現の類型化が強まっている。

④7 有王むなしき姿に取つき、天に仰ぎ地に伏て泣かなしめ共かひぞなき。(高野本卷三・僧都死去)

④8 若君・姫君も声々になきかなしみ給ひけり。(高野本卷十・藤戸)

高野本でも「をめきさけぶ」は多く用いられるが、苦しみや悲嘆の意味は薄れ、単に大声で叫ぶ意味になっているようである。たとえば次の2例は祈る文脈の例である。大声を出して祈る動作に感情の昂ぶりはあろうが、悲嘆の意味は読み取れない。

④9 西光父子が命を召しとり給へや」と、おめきさけんで、呪詛しけるこそ、聞くもおそろしけれ。

(高野本卷二・一行阿闍梨之沙汰)

⑤0 (地震の度) 声々に念仏申。おめきさけぶ事おびた、し。

(高野本卷十二・大地震)

高野本の「をめきさけぶ」で注目されるのは、翻読語「せめたたかふ」と合わり、「をめきさけんでせめたたかふ」という表現が8例見られ類型化している点である(その他「おめきさけんで攻め入る」2例がある)。この表現は、延慶本には一例も見られない。「せめたたかふ」と合わる時の「をめきさけぶ」も、単に大声で叫ぶ意味であるが、戦闘場面を盛り上げる効果がある¹²⁾。次に、「をめきさけぶ」との共起例で、翻読語「せめたたかふ」を漢語「攻戦」を意識して漢字表記したと思われる例とともに挙げておく。

⑤1 源氏の兵是を事ともせず、甲のしころをかたぶけ、おめきさけんでせめ入れれば、桜間の介、かなはじとや
おもひけむ、家子・郎等にふせき矢射させ、我身は究竟の馬を持つたりければうち乗つて、希有にして落にけり。

(高野本卷十一・勝浦)

⑤2 其勢百四五十騎、一の橋へはせむかひ、おめきさけんで攻戦^カ。

(高野本卷十二・六代被斬)

以上のように、延慶本では「をめきさけぶ」「なきかなしむ」はともに悲嘆に暮れる意味を持つが、大声を伴う「をめきさけぶ」の方が「天を仰ぎ地に伏して」と親和性が高かった。高野本では「をめきさけぶ」は単に大声で叫ぶ意味で戦闘場面で使う類型で用いられるようになり、和文や和漢混濁文に広く用いられた「なきかなしむ」が悲嘆に暮れる意味の中心となり「天を仰ぎ地に伏して」と結びついて類型表現を形成したのである。

六 文体指標としての翻読語

和漢混淆文の文体指標には漢語や漢文訓読語が使われることが多かったが、これらは物語の主題的内容に即して多く用いられる語彙ではないため、個性的文体を捉えるのには利用しにくい。この点で、作品毎に用いる語に特徴のある翻読語は、テキスト毎の文体的な個性をも窺いやすい。古くから物語に定着した語も多い反面、作者の表現志向を反映して独自に類型表現を作る場合もあることから、和文や和漢混淆文の文体について「漢」の影響面を把握する指標として有効である。特に例数の多い動詞の翻読語に着目するのは、漢語サ変動詞を中心になされてきた従来の文体研究に欠けていた視点である。

漢語の受容は、字音語による他、訓読語ないし翻読語の形で受容されるが、和語による訓読語・翻読語の受容をこれまでの研究では等閑視されていた感がある。日本語の歴史で漢語受容の流れを俯瞰して捉えようと、まず宣命や、『万葉集』などの和歌や、『源氏物語』などの物語の文章中で翻読語が和歌・和文で定着し、やがて中世以降の文章の中で漢語サ変動詞として定着していくといった道筋を辿るものがある。例えば、本稿で取り上げた「いでく」「いできたる」が先行して定着し、後に「出来す」(「シュツライす」さらに「シュツタイす」となる)が定着する。「おしはかる」から「推量す」が定着していくのも大きく歴史の変遷の面では同様の方向ではなからうか。従来は、字音語である漢語サ変動詞が文章に導入されたことをもって日本語への漢語の定着と見ていたとするならば、その後半の段階だけを対象にしていたことになる。この点は、漢文訓読文の資料での漢語サ変動詞と訓読語の変遷などを踏まえ、

今後追究していかねばならない課題であろう。

翻読語は「和漢」の「漢」の重要な一要素であるが、語種としては和語であるため、文学性を持つ和物語にも馴染みやすい。とりわけ頻度の高い動詞の翻読語は、和漢混淆文の文学作品の内容や文体を作り出す重要な要素の一つであり、文体分析における指標語として有効である。本稿では、『平家物語』の個性的文体の視点から翻読語の運用方法を検討し、古態を留める延慶本では漢文・変体漢文的な翻読表現が混在していたが、高野本ではこれらを意図的に避け、和文的表現によって彫琢していく方法の一端を具体的に明らかにした。『平家物語』の特徴的な翻読語を指標に高野本と延慶本の文体比較を行うと、高野本では「おしはかられてあはれなり」の類型表現により、語り手が人物の心情に共感して述べる叙述をとっていた。また、変体漢文に多い「いできたる」により記録的な叙述をとる延慶本に対し、高野本では「いできたる」を徹底して避け「いでく」と「たり」の意味・機能により、人物の登場を臨場感をもって表現しようとしていた。「をめきさけぶ」は、延慶本では悲嘆する意味で用い「なきかなしむ」と類義的に用いていた。高野本では「をめきさけぶ」は大音声を挙げて戦闘する武士の姿を描くのによく用い、「なきかなしむ」は人物の悲嘆の感情を伝える語として用いて、両語を使い分けていたことを述べた。

これらを大きくまとめるなら、延慶本では「おしはかられて無慚なり」「いできたる」「をめきさけぶ（悲嘆の意）」などの翻読語に漢文的・記録的文体の趣を残していた。高野本では「おしはかられてあはれなり」「いでき・たり」「なきかなしむ」など和文調に馴染む語句や翻読語を類型的に用い、より彫琢を加えた品位ある文体を志向していることが窺える。しかし、高野本が和文的傾向が強く延慶本が漢文訓読調に傾くといった点を指摘するだけでは、特に目新しい指摘とは言えない。本稿では、新たな観点として翻読語を取り上げ、「平安和文にも広く見られる語」「和漢

混淆文に多く見られる語」「『平家物語』に特徴的に見られる語」などいくつかの層をなすことを示した。特に「『平家物語』に特徴的に見られる語」としたものは、軍記物語の表現に必要な語彙を翻読語として多く導入していることを示す点で注目されるであろう。また、これらの中には、語り手の批評語として類型化した「おしはかられてあはれなり」や、戦闘場面の類型表現である「をめきさげびてせめたたかふ」など、高野本『平家物語』の重要語と言える例が指摘でき、文章文体を作る語彙としての翻読語の重要性が確認できる。さらに、一回的・臨時的な語においても、「むすびあつむ」のように作者の社会的位相に関わるであろう個性的な用法も見出せた。

最後に、翻読語による類型的表現を指標として、両本の編者の表現の意図に基づく個性的文体の差異を具体的に述べておこう。高野本が変体漢文用語「いできたる」を回避する点は、和文化を志向した表現というより、文学的表現に徹し従来のテキストと一線を画そうとする意図が働いた結果であろう。また、高野本の「おしはかられてあはれなり」は、漢語による表現が語りの詞章に情感を込めるには不向きな面があることを考えての表現であろう。「悲しさ」おしはかられて無慚なり」のような心情の直接的表現と漢語との組み合わせを避け、「(心の中) おしはかられてあはれなり」という和語同士の結びついた臙化表現によって、聞き手に人物の心情を想像させようとする意図が窺えよう。また、「叫喚、攻戦」のような漢語表現の組み合わせに基づく翻読表現「をめきさげびて、せめたたかふ」は、戦闘場面の慣用表現となり、武士達が大声を上げて敵と戦闘する様をリアルに映し出し、かつ、リズムよく声に出して語るのに効果的である。本稿では、「をめきさげぶ」を漢語の原義からずらして用いていると考えたのであるが、このような理解はあるいは表面的に過ぎるかも知れない。高野本の作者が「をめきさげぶ」のもとになる「叫喚」の原義「(地獄など)悲惨な状況で泣き喚く」をも意識して使用した可能性を排除できないからである。高野本がその

『平家物語』の翻読語と個性的文体

ような原義も意識しながら「大声を出す」意味に用いていたのならば、死を覚悟して戦闘する武士の悲壮な心情を滲ませた表現とも言えるのではなからうか。高野本のテキストからは、翻読語を組み合わせた類型表現を生み出し、物語内容を律動的で文学的な表現で語り、聞き手に場面や人物の心情をより実感的に伝えようとする作者の意図を指摘することができる。

注

- (1) 拙稿(一九八九)(二〇一八)(二〇一九)(二〇二〇a)(二〇二〇b)(二〇二二)を参照されたい。
- (2) 『平家物語』に多い「おしはかる」は『源氏物語』で94例もの多くの例が見られる。その他、「あそびたはぶる」「うばひとる・ばひとる」「のこりとどまる」など、『源氏物語』と『平家物語』等の和漢混淆文の作品とで、共通して多く見られる語があるが、ともに漢詩・漢文からの影響が想定される。『源氏物語』は翻読語を用いやすい点で和漢混淆文に近い性質を持つのである(拙稿二〇二〇aを参照)。また、『日本古典対照分類語彙表』で『平家物語』の他に『万葉集』にのみ見える「あきたる(飽足)」も漢詩・漢文の影響で用られたものである(拙稿二〇二〇bを参照)。
- (3) 『訓点語彙集成』によると、「オシハカル」は「推」9例、「付」3例の付訓例が見られる。最古は九〇〇年頃。
- (4) これら4語は「オシハカル」の訓読が可能である。「推度」「推断」の「度」「断」は、観智院本『類聚名義抄』に「ハカル」の訓がある。『大漢和辞典』は「推測」「推度」「推断」「付度」「推察」で中国漢文の例を挙げる。
- (5) 「推量」は日本漢文に例が多いが、『大漢和辞典』では例示がなく、『漢語大詞典』『近代漢語大詞典』では立項自体がない。「推量」は、唐代以降用いられたが例数は少なく、一般には「推測」が多く用いられたようである。
- (6) 「オシハカル」を「推量」で表記した例は、『今昔物語集』『打聞集』にも各1例が見える。『打聞集』は総数で1例だが「推量」で書くのは漢文志向の表記をとる同書の性格による。『今昔物語集』では卷三ノ十四の例を除いて他は全て延慶本と同じ「押量」の用字で表記している。
- (7) 古文書類の漢語「推量」の例は「加点者、以推量加之了」(『石清水文書』寛喜三年(一一三三))のように概ね、ある事情

- の推量である。これに対し、『平家物語』の例は、すべて他の人の心の推量で、用法に偏りがある。
- (8) 「いできたる」の仮名書き例は『三宝絵』『法華百座聞書抄』に見え、『三宝絵』4例中2例が「到来」、『法華百座聞書抄』6例中4例が「到来」である。また、漢語サ変動詞「出来ス」では、『今昔物語集』で「到来」1例、土井本『太平記』では4例中「到来」2例が見られる。「いできたる」「出来す」いずれにおいても「到来」の例は半数以上を占めており、和漢混淆文においても「到来」用法が浸透していることが窺える。
- (9) 屋代本では「去程ニ、義王取居ヘラレテ三年ト申ニ、又白拍子ノ上手一人出来ル。」(抜書・祇王)「打続キ宮アマタ出来ラセ給ケリ。」(巻八・山門御行)などの例を含め「いできたる」は9例が見られる。
- (10) 連文は同義的結合であるため、転倒形も少数ながらあり得る。『大漢和辞典』で「喚叫」は「叫喚」と同じとして例を挙げないが、『百練抄』(鎌倉後期)の正暦三年(九九二)記事に「喚叫之声」とあるのが、音読みなら転倒形に相当する。「なきかなしむ」でも『日本書紀』に「悲泣」の転倒形の「泣悲」がある(拙稿二〇二二)。
- (11) 『中右記』の「仰天伏地」は「欣」「歎」「訴」など多様な表現に係り、悲嘆には限らない。これは中国の例に通じる性質である。栞(一九九九)は、中世の「仰天伏地」では慣用化が進むとともに具体的動作性を失い、「悲痛・歎息」などの感情表現の程度の甚だしさを表すようになったと指摘する。
- (12) 土井本『太平記』でも「をめきさげびてせめたたかふ」4例、「をめきさげびてたたかふ」4例、「をめきさげびてせむ」1例など、軍記物語の慣用句となっている。

参考文献

- 鈴木泰(一九九五)「メノマエ性と視点(1)―移動動詞のゝタリ・リ形とゝツ形、ゝヌ形のちがひ―」(『国語学論集 築島裕博 上古稀記念』汲古書院)
- 栞竹民(一九九九)「「仰天」のよみと意味」(『鎌倉時代語研究』三二 武蔵野書院)
- 拙稿(一九八九)「続紀宣命の複合動詞―漢語との関連を中心として―」(『国文学論叢』三四)
- (二〇一八)『万葉集』における連文の翻読語―「春さりくれば」「春されば」の解釈におよぶ―(『人文学』二〇二二)
- (二〇一九)『源氏物語』の翻読語と文体―連文による複合動詞を通して―(『同志社国文学』第91号)

『平家物語』の翻読語と個性的文体

(二〇二〇a) 『源氏物語』における漢文訓読語と翻読語―「いよいよ」「悲しぶ」「愁ふ」「推し量る」―(『同志社国文学』第92号)

(二〇二〇b) 「連文による翻読語の文体的価値―「見れど飽かず(飽き足らず)」の成立と展開―(『国語語彙史の研究』三十九 和泉書院)

(二〇二二) 『今昔物語集』における翻読語と文体(『国語語彙史の研究』四二 和泉書院)

資料

延慶本『平家物語』の用例検索・引用は『延慶本平家物語 索引篇上・下』(勉誠出版)『延慶本平家物語 本文編上・下』、高野本『平家物語』は『平家物語(高野本) 語彙用例総索引』(勉誠出版)で検索し、引用は新日本古典文学大系本を用いた。高野本の検索には「中納言 日本語歴史コーパス」も使用している。『将門記』『陸奥話記』の引用は新編日本古典文学全集(小学館)を利用した。その他、『三宝絵詞自立語索引』(笠間書院)『法華百座聞書抄総索引』(武蔵野書院)、『土井本太平記 本文及び語彙索引』(勉誠社)、『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院)、『平安時代複合動詞索引』(清文堂)、『訓点語彙集成』(汲古書院)、『古記録・古文書・平安遺文』、『鎌倉遺文』について東京大学史料編纂所データベース、『六国史』、『国史大系』、『全唐詩』、『全唐文』、『四部備要』(凱希メディアサービス)のDVD版、『文淵閣四庫全書』(迪志文化出版)のDVD版、大正新脩大藏経データベース(SA12018)により検索した。古辞書は『古本節用集研究並びに総合索引』(勉誠社)、『中世古辞書四種研究並びに総合索引』(風間書房)、『邦訳日葡辞書』(岩波書店)を利用した。